TAIWAN BOOKSTAR 2021

cover illustration by
陳又凌 Chen Yu-lin

| take free |

発行：
台北駐日経済文化代表処
台湾文化センター

文化、芸術、創造、生活、

南方の島国 台湾

目 次

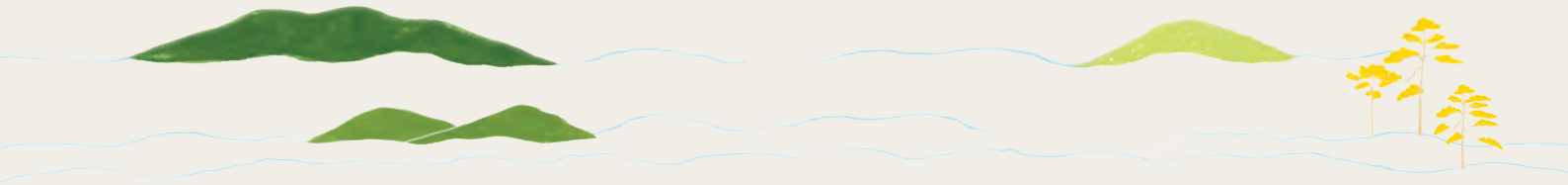
読者の皆様へ —— 01

文学の夢 —— 03

南方生活 —— 10

台湾職人 —— 17

推薦作家 —— 24



読者の皆様へ

台北駐日経済文化代表処台湾文化センターは、台湾の素晴らしさを日本の方々に紹介するために、近年台日の文化交流を深めてきました。この小冊子『2021 TAIWAN BOOKSTAR』はその名の通り、一冊一冊がまるで星のように、文化を伝える力を湛えて輝いています。台湾の素晴らしい書籍と作家を日本の読者の皆様に紹介したいときらめいています。

今年は幸運にも誠品書店と協力することができました。誠品書店は人文芸術書を専門とする書店としての長年の努力が実を結び、成熟したライフスタイルブランドとしての地位を確立し、アジアで最も重要な文化資産の一つとなっています。誠品書店は読書の促進と美しい生活の創造に取り組んできました。毎年発行される年間ベストセラートップ100は信頼度の高い売り上げランキングであり、中国語書籍市場の指標となっています。

『2021 TAIWAN BOOKSTAR』は「南方の夢」を年度テーマとし、文学、グラフィックデザイン、人文科学の普及などの枠を越え、「文学の夢」、「南方生活」、「台湾職人」の三つのテーマを通して、皆様を南方の夢の世界にお連れいたします。日本にとって台湾とは、よく知っているはずなのに突然知らない顔を見せる不思議な感覚の南方の島です。この小さな島には高山も湖も、峡谷も断崖も、また名所旧跡もあれば、伝統的な市場やグルメもあります。台湾で最も感動的なのは台湾人の情熱と人情味なのです。しかし、そのような感情と記憶の担い手となる台湾の書籍が日本の皆様の心に印象を残すことは多くありませんでした。

誠品書店の長期に渡る中国語出版物の読書傾向観察から『2021 TAIWAN BOOKSTAR』では18冊の出版済、出版予定の作品を「テーマ別ブックリスト」としてピックアップしました。また台湾を代表する作家として、蔡素芬、何敬堯、焦桐の三人を推薦しています。台湾の特色を濃厚に伝える3人の著作を通して、読者の皆様がこの台湾という土地に対してさらに一層の親近感を持っていただける信じています。どうぞ皆様、この小冊子がいざなう南方の文化探索の旅に出て、豊穣な文化の奥深さを体験してください。

2021年11月　台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

UNIT 01

文学の夢

文化が湛える情感

溢れ出る情感、思いのままにはばたく想像、
一緒に台湾文学の世界を歩きましょう!

雨の島(仮題)

苦雨之地

著 呉明益(ご・めいえき) Wu Ming-yi	絵 呉明益、呉亞庭
2021年 刊行予定	河出書房新社
書影は原書のもの	提供:新經典文化

『歩道橋の魔術師』、『自転車泥棒』で日本でもよく知られている著者は呉明益(ご・めいえき)である。その作品はフランスの島文学賞(Prix du livre insulaire)、本屋大賞翻訳小説部門第三位を獲得、『亞洲週刊』の年度小説にも選出され、ブッカー賞入選なども果たしており、世界10か国以上で翻訳出版されている。彼は都市の喧騒から遠く離れ、台湾花蓮の静かな町で教鞭をとっており、その筆致には世俗を離れた静謐な感覚が湛られている。

2021年の新作『雨の島(仮題)』はさほど遠くない未来を舞台とした六つの物語から構成され、人、動物、自然、土地、それらの関係を深く探求している。呉明益は本書のアートデザインにも参加。書籍中の手描き挿絵の多くは彼の手によるものである。それは18世紀の西洋科学図版の雰囲気で描かれ、台湾の自然とそこに生きる命を見事に表し、見る人の心を震わせる。

冥王星より遠いところ

比冥王星更遠的地方

著 黄崇凱（こう・すうがい） Huang Chong-kai　訳 明田川聡士

2021年9月

書肆侃侃房

黄崇凱（こう・すうがい）は台湾で最も傑出した若手小説家の一人である。現在までに四作の長編小説と短編小説集一作を著しており、2018年には台湾国際書展大賞を受賞している。『冥王星より遠いところ』は彼の長編一作目にあたる作品である。小説中の二人の主人公、末期癌の母親に付き添う文学青年、そして幸せな家庭を持つ高校の歴史教師は同じ時に小説を書いている。しかし彼らは自分達が書きあげた小説がお互いの人生そのものであることを知らない。仮想世界はワームホールのようにお互いの大脳に侵入し、二人の人生は変容を遂げ始める。「神を演じる」という究極の妄想の背後には、自分自身の人生が本物なのか偽物なのか、誰もそれをはっきりと知る事は出来ない。

ブラックノイズ

荒聞

著 張渝歌（ジャンユーグァ） Chang Yu-ko　訳 倉本知明

2021年8月

文藝春秋

張渝歌（ジャンユーグァ）は以前は医師であったが、2010年より主要な文学賞で作家としての頭角を現し始めた。作品は台湾文化部テレビ番組脚本創作長編佳作賞を受賞している。彼はその医学的背景からクライムストーリーの描写に長けており、「最も期待されている推理の新星」として知られている。

『ブラックノイズ』は仕事の状況が芳しくないタクシー運転手を主人公にストーリーが展開していく。運転手の妻には得体のしれない女の話し声が絶えず聞こえており、彼はそこからさまざまな奇妙な事件を経験していく。事件の調査に関わっていくうちに、彼は妻の状況が単独の出来事ではなく、歴史的な未解決事件にまで遡ることを知る。

『ブラックノイズ』は聴覚と視覚によってもたらされる恐怖を描写するだけでなく、台湾の歴史と心霊怪異譚を巧みに組み合わせ、未解決事件を解決する過程で、心理サスペンスと人生の浮き沈みを積み重ねながら物語を綴っていく。

永遠の時の流れに —母・美君への手紙

天長地久：給美君的信

著 龍應台（ロン・インタイ） Long Ying-tai　訳 劉燕子、和泉ひとみ

2019年12月

集広舎

台湾の南部の漁村で育った龍應台（ロン・インタイ）はアメリカに9年留学し、ヨーロッパで13年暮らし、香港で9年教鞭をとった。その後台北市初の文化局長、台湾初の文化部長（文化相）を歴任した。

2017年、認知症の母親の世話をするため、龍應台は住み慣れた台北にきっぱり別れを告げ故郷の屏東潮州に戻った。母に寄り添い、虚ろなまなざしの母を見つめながら、彼女は母親の美君（メイジュン）に宛てて、決して読まれることのない手紙、「母・美君への手紙」を書いた。

これら19通の手紙は、命に対する信念の実践であり、親の世代への感謝と敬意、そして次の世代への親身なアドバイスである。『永遠の時の流れに—母・美君への手紙』には彼女の告白、反省、執着、そして自問自答が綴られている。それは時間と戦う全ての子供たちへの龍應台からの贈り物、自身の経験からの言葉である。人生には時間を無駄にできないこともあるのだと。

フォルモサに咲く花

傀儡花

著 陳耀昌（チェン・ヤオチャン） Chen Yao-chang　訳 下村作次郎

2019年9月

東方書店

陳耀昌（チェン・ヤオチャン）は台湾で初めて骨髄移植を成功させた医師で、血液疾患と遺伝学の専門家でもあり、素晴らしい学術成果を上げている。同時に彼は歴史と文学にも強い興味を抱き、歴史家が賞賛する程の台湾史の長編小説を上梓している。『フォルモサに咲く花』は2016年に台湾文学奨金典賞を受賞。本書の舞台となったのは1867年に起きた海難事故で、この時台湾南部に上陸したアメリカ人船長が先住民（台湾原住民族）に侵略者だと誤解され殺害された。この事件は台湾、米国、清国の間で国際紛争を引き起こし、最終的に台湾南部の先住民は米国と台湾史上初の国際条約に署名することとなり、これによって台湾の運命が変わることとなる。

本作は台湾の公共テレビ（公共電視）でドラマ化され、台湾初の歴史大河ドラマ『斯卡羅（スカロ）』として2021年に放送された。150年以上前のほとんど知られていない、しかし重要な歴史的事件を再現したこのドラマを通して、多元文化、多民族の「フォルモサ」（台湾）についてより深く知ることができる。

ここにいる

生之靜物

著 王聡威（ワン・ツォンウェイ） Wang Tsung-wei　訳 倉本知明

2018年8月

白水社

王聡威（ワン・ツォンウェイ）は台湾文芸界で最も重要な作家の一人である。小説家であるだけでなく、流行発信の業界にも足を踏み入れ、いくつものファッション誌の編集長を歴任。現在は台湾を代表する文芸誌『聯合文学』の編集長を務めている。

『ここにいる』は2013年に日本で起きた事件に触発された。大阪市のマンションで暮らしていた母子が死後三ヶ月以上もたってから発見された事件。母親は夫の暴力に耐えきれず息子を連れて家を出たが、最後には完全な孤立無援の状況に陥ってしまったのだった。社会問題に強い関心を寄せる王聡威はこの小説を通して、後戻りの出来ない悲劇的結末に入り込んでしまい、孤独な行き止まりで最後を迎える社会的弱者の無力さと心の葛藤を再現してみせた。これは孤独死を描いた台湾初の小説であり、台湾の文芸界の人間性豊かなまなざしを伺い知ることができる。

UNIT 02

南方生活

クリエイティブライフ

台湾の古い路地に足を踏み入れ、
伝統的な市場を歩き、
台湾人の日常を身近に体験してみよう！

鬼地方（仮題）

鬼地方

著 チェン・スーホン 陳思宏 Chen Shih-hung

2022年 刊行予定　早川書房

書影は原書のもの　提供：鏡文學

メディア出身のジャーナリストで俳優、通訳でもある陳思宏（チェン・スーホン）は、現在ドイツ在住。複数のアイデンティティや、異なる文化からの影響は、彼の視点を独創的で躍動感溢れるものとした。『鬼地方』は2020年台湾文学賞を受賞している。主人公は生まれ育った彰化県永靖から逃げ出そうともがいていた。ついに故郷から逃げ、ドイツに渡るのだが、それでも彼は故郷を思うのを止められなかった。陳思宏の『鬼地方』はベルリンでの殺人事件を通して、それを一路追いかけ彰化県永靖まで遡り戻っていく。彼は自身の人生経験を生かし、多様な視点を組み合わせて台湾で暮らすことの現実を見せる。台湾農村の日常や家族関係についてだけでなく、台湾の伝統的な価値観や台湾の社会体制にも表現し、台湾での生活の現実的な側面を描き出している。

台湾 路地裏名建築さんぽ

街屋台灣：100間街屋，100種看見台灣的方式！

著 ジョン・カイシアン 鄭開翔 Zheng Kai-xiang　訳 杉浦佳代子

2020年12月

エクスナレッジ

鄭開翔（ジョン・カイシアン）は台湾で初めて水彩の技法で台湾の街並と文化を記録した職業画家であり、都市スケッチアーティストである。「写真を撮る代わりに絵を描こう！」と提唱している。作品の色調は温かみがあり、独特の視点と人への温かいまなざしに満ちている。イタリアの国際芸術コンペティション、エーダッシュデザインアワード＆コンペティションのグラフィックデザイン部門でシルバーアワード受賞の栄誉にも輝いている。

『台湾 路地裏名建築さんぽ』には、100枚の水彩画が収められており、そこから100種類の台湾の街並みの美を伺うことができる。看板、トタン、給水塔、赤レンガ、帆布、アーケード、さまざまな色彩がまじりあう壁の色、建築と共生している樹木、積み重ねられた荷物、プラスチックの椅子、オートバイ……積み重なっていく濃厚な生活感。本書は画家鄭開翔は台湾の大通りから路地までその足で歩き、一軒一軒町の建築の独特な佇まいをスケッチし、大衆文化を、都市の景観と建築を、そして人とで織りなす物語を記録したものである。

台湾の美味しい調味料 台灣醬

100%台灣釀醬

著　種籽設計 SEED DESIGN　　訳　光瀬憲子

2020年8月

翔泳社

種籽設計（SEED DESIGN）は台中のビジュアルデザイン専門の設計事務所であるとともに地元の歴史と大衆文化を結びあわせて、特色ある地元の特産品を提供し続けている。作品はiFパッケージデザイン賞、ゴールデン・ピン・デザインアワードなどを受賞している。『台湾の美味しい調味料台灣醬』で種籽設計は35種類の伝統的な食材を用い、簡約化した伝統製法で、台湾人にとって日常生活に欠かせない台湾醤を作り出す。台湾醤を使えば台湾の様々な料理のおいしさを手軽に再現できる。本書は食の記憶から台湾の生活を描き、人々と台湾の情感をつないでいく。

台北歴史地図散歩

臺北歷史地圖散步

著　台湾中央研究院 デジタル文化センター　　監訳　森田健嗣

2019年3月

ホビージャパン

台湾中央研究院デジタル文化センター制作・発行。現在、台北、台中、台南の三都市の歴史地図散歩が発行されている。このシリーズは「地理情報システム」（GIS, Geographic Information System）技術を使い、モバイルアプリと連動させた新しいタイプの歴史ガイドブックである。

『台北歴史地図散歩』はその中の一冊。最も古いものは1895年という12枚の歴史的古地図が選ばれ、GISテクノロジーを用い現代の地図と比較整合し、200葉以上の貴重な記録写真を組み合わせている。図版を見るだけで歴史と変遷を見る事ができる。本書では24のテーマについて専門家が特別記事を寄せており、わかりやすい筆致で読者を景勝地の歴史的故事、文化的背景と逸話の旅にいざなう。

台湾名建築めぐり

再訪老屋顔

著　老屋顔（辛永勝・楊朝景）
Old House Face

訳　小栗山智

2019年3月　　エクスナレッジ

「老屋顔」とは歴史的建築を研究するためのスタジオであり、2013年から台湾の古民家やその構成要素の画像収集を始めている。鉄窓花と呼ばれる鉄製の装飾窓枠、銅線の枠にセメントと砕石を流しこみ磨き上げた磨石子と呼ばれる人造大理石、陶磁器タイルなど、台湾古民家を構成するそれらの要素を文化的で創造的な製品にデザインするアーティストで構成されているグループである。『台湾名建築めぐり』は2018年の『台湾レトロ建築案内』の続編となる。「老屋顔」チームは1年間という時間を費やし台湾中を駆け巡り、古民家探索は金門と馬祖の軍事禁止区域だったところから、観光地として有名な澎湖などの離島にまで及んだ。本書では装飾窓枠、マジョリカタイル、花の意匠が透かしになったセメントタイル、磨石子などの精巧で複雑な建築風景を紹介し、更にそのような古民家の背後にある無名の英雄、職人に話を聞き、職人技と精神、台湾の貴重な伝統工芸を記録し、そのような都市と人との物語を探った。

台湾花模様

美しくなつかしい伝統花布の世界

花様時代：台灣花布美學新視界

著　陳宗萍（チェン・ゾンピン）　　訳　如月弥生
Chen Tsun-ping

2018年9月

グラフィック社

著者陳宗萍（チェン・ゾンピン）は台湾の伝統人形劇（布袋戯／ポーテーヒー）の劇団に嫁いだ。大学では芸術を専攻し、台湾の伝統的な花柄生地、台湾花布を布袋劇の衣装として使い、台湾伝統芸術の新しいスタイルを生み出してきた。

『台湾花模様 美しくなつかしい伝統花布の世界』では1960年代に流行が始まった台湾花布を紹介している。さまざまな時代の台湾花布の意匠を構成する世界各地のアートの要素を詳細に説明している。また本書では花布が非常に強く「日本風」、「アールヌーボーとオプ・アート」、「漫画とポップアート」などの外国の意匠を備えていると結論付け、ここから台湾という島国の国民が持つ特別な包容力と想像力を知ることができるとしている。

この本は708種類の伝統的な台湾花布のパターンを収録している。これらは著者が台湾各地の古い生地店を訪ね歩き、店主の教えで布団生地やカーテン生地を一つ一つ探し出したものだ。本書は現代のデザイナーの視点から、伝統的な台湾花布のパターンと色彩を体系的に解釈した初めての書である。

UNIT 03

台湾職人

巧の矜持

目の前に集中し、技芸の道に熟達し、
精巧な芸術になる。

侯孝賢と私の台湾ニューシネマ

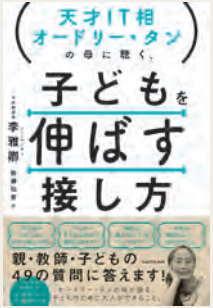
著 チュー・ティエンウェン 朱天文 Chu Tien-wen

訳 樋口裕子、小坂史子

2021年4月 竹書房

侯孝賢（ホウ・シャオシェン）は1973年に映画業界に足を踏み入れた。侯孝賢と台湾の新世代の映画製作者たちは、当時盛んだった国威発揚映画とは異なる「台湾の人々が暮らす土地の物語」というテーマのトレンドを打ち出し、台湾映画を台湾ニューシネマの時代に導いた。彼は台湾ニューシネマを代表する重要な人物である。カンヌ映画祭最優秀監督賞、ヴェネツィア映画祭金獅子賞、金馬奬最優秀監督賞を3回受賞しており、代表作は『悲情城市』、『戯夢人生』、『恋恋風塵』、『黒衣の刺客』など多数。

長きにわたり侯孝賢監督の脚本を書いてきた朱天文（チュー・ティエンウェン）は、台湾の著名な小説家でエッセイストであり、また台湾ニューシネマ界の最も重要な脚本家の1人でもある。その創作によって生み出される雰囲気と想像力は侯監督の心を深く動かしてきた。本書には朱天文の長年の研究による侯孝賢作品のレビューとエッセイ、そして彼女の所有する貴重な写真が多数収められている。



天才IT相オードリー・タンの母に聴く、子どもを伸ばす接し方

乖孩子的傷，最重

著 李雅卿（リー・ヤーチン） Li Ya-qing　訳 岩瀬和恵

2021年6月

KADOKAWA

天才として知られる台湾のIT大臣唐鳳（オードリー・タン）は、14歳で学校を中退し自宅で自主学習することにした。どんな教育と環境がこのような子供の健やかな成長に必要なのだろうか？彼女の母親である李雅卿（リー・ヤーチン）は教育者であり、本書で自身が創設した「種籽學苑（種子学苑）」について、どのように子供たちの自主学習を育むかを、また教えることに悩む教師たち、しかし親達は子供の教育についてもっと困惑し、心配していることなどを紹介している。唐鳳は幼い頃から並外れた自己学習能力を発揮し、「自主学習」が問題解決の鍵となっており、その過程で母の李雅卿の指導は不可欠なものだった。

本書から台湾の教育革新は活力に満ちていることがわかる。また、より多様化する時代に適応するための台湾の教育制度、新しいスタイルの教育の開発に努めているプロの熱意を見ることもできる。

Auオードリー・タン 天才IT相7つの顔

唐鳳：我所看待的自由與未來

著 丘美珍（アイリス チュウ） Chiu Mei-chen、鄭仲嵐（てい・ちゅうらん） Zheng Zhong-lan

2020年9月

文藝春秋

唐鳳（オードリー・タン）は2020年3月、コロナ禍にリアルタイムマスクマップ作製をサポートしたことで日本で非常に人気の高い人物となった。台湾のデジタル担当大臣で、IQが非常に高い天才、トランスジェンダーで、若く、日本の政界には登場したことのないタイプの人物である。そのため、唐鳳はその英語名のカタカナ表記、オードリー・タンで、熱心にインターネット検索されるようになり、メディアが競って彼女の話題を取り上げるようになった。

この本は読者のために、天才児童、独学の少年、プログラマー、起業家、トランスジェンダー、市民ハッカー、デジタル担当大臣というオードリー・タンの人生における7つのアイデンティティを、そしてそれぞれの段階での彼女が経験した困惑、探索と学びについて詳しく解説している。また彼女は自主学習に成功した心構えを共有し、自由への信念を掘り下げ、テクノロジーの未来についての見解を披露している。

筆録 日常対話 私と同性を愛する母と

我和我的T媽媽

著 黄惠偵（ホアン・フイチェン） Huang Hui-chen
訳 小島あつ子

2021年7月

サウザンブックス社

著者の黄惠偵（ホアン・フイチェン）はもともと葬儀の仕事に従事していたが、偶然ドキュメンタリー監督の楊力州（ヤン・リーゾウ）の映画の主人公となり、そこから監督としてのキャリアをスタートさせた。映画『日常対話』は、2017年ベルリン国際映画祭テディ賞と台北電影獎（映画賞）の最優秀ドキュメンタリー映画賞を受賞した。また台湾初のドキュメンタリー代表として第90回アカデミー最優秀外国語映画賞に出品された。『日常対話』の短編映画バージョンが『筆録 日常対話私と同性を愛する母と』で、同名の書籍として本書が短編映画と同時に出版された。

本書の中で黄惠偵は、自身のセクシュアリティを隠さない母親、父親の不在、家族、母親のガールフレンド達、そして幼い頃の思い出の中のものについて率直に語っている。これはある女性と母との和解と自己探求の物語である。一人の台湾の監督として、人生と文化の密接なかかわりを見せてくれる。

おうちで作れる 台湾小麦粉料理

國寶級大師的中式麵食聖經

著 周清源（ゾウ・チンユエン） Zhou Qing-yuan

2018年11月

世界文化社

「周老師」として知られる周清源（ゾウ・チンユエン）は、台湾小麦粉料理界の人間国宝的存在である。彼はこの業界に人生の40年を捧げ、育てた才能は数万に及ぶ。鼎泰豊会長の楊紀華でさえ彼を「中華小麦粉料理界のリーダー」と呼ぶ。

40年以上前から彼は世界各地を訪れ、食材の特性の研究、製造技術の研究、レシピの収集、小麦粉料理の歴史文化の調査などを行い、一生のエネルギーと時を費やしてそれらの知識を中華小麦粉料理の宝典に納めた。

周老師は自身の学ぶ過程で、伝統的な徒弟制度や製法を秘密にするなどの業界の慣習に苦しめられた。その経験から、伝統を次世代に引き継ぐために、彼は長期にわたって探求し、改良した全ての配合とレシピを全て本書に記録した。知識から実践まで、歴史、材料、道具、技術からレシピまで、ここにはすべてが記録されている。

おなじ月をみて

同一個月亮

著 ジミー・リャオ 幾米 Jimmy Liao　訳 天野健太郎

2018年10月

ブロンズ新社

台湾の有名絵本作家ジミー・リャオ、2015年に大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレに招待されるやいなや日本で広く注目され、愛されるようになった。彼は子供の絵本の体裁で示唆に富む物語描くことを得意とし、あらゆる世代の読者の共感を呼び、また大人が読む絵本というスタイルを開拓した。これまでに50種類以上の作品が出版されてきた。彼の作品は何度もの金鼎賞、ベルギーセイラム青少年文学賞9-11歳青少年向け最良図書、国際児童図書評議会スウェーデン支部ピーターパン賞銀賞などを受賞しており、アストリッド・リンドグレーン記念文学賞にも何度もノミネートされている。作品は世界10か国以上で出版され1,000万部以上も発行されている。

『おなじ月をみて』は子供の純真で希望に満ちた視点から始まり、窓辺で月を見守りながら、戦場から父親が帰ってくるのを指折り待ちわびるハンハン少年が描かれる。温かみのあるタッチを通して物語が紡がれ、人と人との温かい絆、全ての人の心の中にある穏やかな平和と善への深い希望にも触れる。

UNIT 04

推薦作家

台湾歴史、妖怪文化、飲食文学,

三つの全く異なるジャンルから,

三人の強い個性を備えた作家を紹介する。

蔡素芬

サイ・ソフン

Tsai Su-fen

1963年生まれ，台湾淡江大学中国文学科卒業後，テキサス大学サンアントニオ校バイリンガルバイカルチュラル大学院修士コース卒業。高校時代から小説執筆を始め、大学在学時からいくつもの文学賞を受賞している。装飾を削ぎ落とした内省的な筆致で、女性作家ならではの繊細な心理描写を作風とし、やわらかな眼差しで歴史を捉え、新たな地平を台湾の郷土小説に切り拓いてきた。1993年、『明月（原題：鹽田兒女）』で、聯合報長編小説賞を受賞。同作は、後に台湾の公共テレビ（公共電視）でドラマ化される。1998年出版の第二部『オリーブの樹（原題：橄欖樹）』で中興文芸賞を受賞。2014年シリーズ完結の第三部『おしゃべりな星たち（仮題／原題：星星都在説話）』を刊行。20年を費やして完成させた三部作は、主となるエピソードは異なるが、登場人物は相互に関連を持つ。台湾の異なる世代を取り巻く社会環境と各々の人生のめぐり合わせが丁寧に描き出されている。

著書はそのほかにも、長編小説の『姉妹書（仮題／原題：姐妹書）』、『キャンドルの饗宴（仮題／原題：燭光盛宴）』、短編小説集の『台北駅（仮題／原題：台北車站）』、『海辺（仮題／原題：海邊）』、『花の涙をあしらった象（仮題／原題：別著花的流淚的大象）』などがある。『キャンドルの饗宴』は、『亜洲週刊』が選ぶ十大華語小説ならびに台湾出版界の最高栄誉「金鼎賞」に輝く。2021年、5年ぶりとなる長編作品『藍い家（仮題／原題：藍屋子）』を発表。

蔡素芬の代表作

明月
鹽田兒女（原題）

オリーブの樹
橄欖樹（原題）

攝影：黃仁益

何敬堯 He Jing-yao

ホー・ジンヤオ

1985年生まれの新進気鋭の小説家の彼は台湾大学文学部外国語文学科卒、清華大学台湾文学所博士課程満期退学。全球華文青年文学賞、台北県文学賞、文化部芸術新秀を受賞。『盡頭之濱』で台湾推理作家小説賞にノミネート。バーモント・スタジオセンターのアーチスト・イン・レジデンスに選ばれ渡米滞在。中正大学ライター・イン・レジデンス。彼の創作はファンタジー、歴史、推理、妖怪などに及び、『妖怪台湾』は彼の代表作となっている。

2014年に文化部年度芸術新秀奨を受賞し、歴史幻想小説『幻の港』を出版。2016年には国家芸術基金会創作奨を受賞し、推理短編集『怪物たちの迷宮』を出版。エッセー集『佛蒙特沒有咖哩』（バーモントにバーモントカレーはなかった）はバーモント・スタジオセンター滞在時の経験と文化を記録して書き下ろしたものだ。

『妖怪臺灣』シリーズ以外にも台湾妖怪、ファンタジー小説、音楽が組み合わされた幻想小説シリーズ『妖怪鳴歌錄』があり、漫画、スマホゲーム、テーブルゲーム、ミュージカル化されている。

何敬堯の代表作

妖怪台湾（仮題）
妖怪臺灣（原題）

妖怪鳴歌録（仮題）
妖怪鳴歌錄（原題）

焦桐 Jiao Tong

ジャオトン

1956年生まれ、中国文化大学演劇学部、演劇研究所修士コース卒業。舞台劇『老唐的舊布鞋』（唐さんの古い布靴）の台北講演を脚色演出。全国学生文学賞、時報文学賞、聯合報文学賞など受賞多数。彼の詩作は生命の躍動に溢れ、鮮やかなイメージを呼び起こす。散文は細部にまで目が行き届き、筆致は率直で穏やか、とりまく世界を厳しい目でジャッジし、内面の良心に目を向ける。2004年に出版された『完全強壮レシピ（原題：完全壯陽食譜）』の後、彼は美食家と間違われ、ここから飲食文化の研鑽を始め、雑誌『飲食』を創刊した。毎年『飲食文選』（食のエッセイ文コンテスト）を主宰し、台湾の現代食文学を20年間育ててきた。

代表詩作は『焦桐詩集：1980～1993』、『完全強壮レシピ（原題：完全壯陽食譜）』、『青春の標本（原題：青春標本）』，散文は『世界の辺縁で（原題：在世界的邊緣）』など三十以上。詩作は英語、日本語、フランス語など多数翻訳され、海外で出版されている。年度食文学選、詩選、小説選、散文選など各種テーマ選集を50以上も編纂している。

焦桐の代表作

味の台湾
味道福爾摩沙（原題）

2018フードエッセイ選集（仮題）
2018飲食文選（原題）

カバーデザイナー

陳又凌

（チェン・ユーリン／Chen Yu-lin）

ユトレヒト芸術学校（NL）卒業。修士（編集デザイン）。散歩、自然、猫との会話、絵画を愛する。2019年に英国WIA賞、2015年、2016年にイタリアボローニャ国際絵本原画展入賞、2017年に韓国ナミコンクール入賞。表紙イラストのデザインコンセプトは、台湾のイメージを日本の読者に鮮明に伝えること。この南の島の美しさと素晴らしさを読者の心に刻むことである。山、雲海、小さな汽車などに加えて、タイワンツキノワグマ、ミカドキジなどの台湾固有種や嘉明湖の特別な景観も描かれている。また国際的に活躍する台湾パフォーマンスアートグループ雲門舞集（Cloud Gate）、優人神鼓（U-theatre）も描かれ、台湾の豊かで多様な自然と文化的景観を表現している。

2021 TAIWAN BOOKSTAR

2021年11月発行
発行｜台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター
企画・編集・制作｜誠品書店 eslite bookstore
編集・執筆｜誠品書店編集部
印刷｜經緯印藝

eslite 誠品

台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

台湾文化センターは、台日文化交流のプラットフォームとして、台湾の芸術や文化を広く紹介しています。また、台湾の文化産業の発展や、日本マーケットへの進出・拡大を促進するため、台湾と日本の芸術・文化関係の各団体と協力し、企画展、イベント、情報提供など、広範囲の活動を行っています。いつでもお気軽にお越しください。

台北駐日経済文化代表処
台湾文化センター

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-12虎ノ門ビル2階

開館時間｜月曜～金曜 10：00-17：00
（土、日曜と祝祭日はイベント開催時のみ開館）

TEL：03-6206-6180 FAX：03-6206-6190
Email：twcc@moc.gov.tw